

人それぞれの体験にもとづく訴えや、いわゆる美文調を綴ることには、さして難かしいことではないけれど、それらの文章はとかく表層を流れて、人の心をとらえるものではない。書くことの楽しさ、もしくは辛さ以上に、その怖さを知っている人の文章こそ、多くの読者を惹きつける。

『市民タイムス』創刊二十周年を記念して、このほど発行された中野幹久著『みすず野』(市民タイムス刊)を読了した私は、

わが郷土に人あり、の感を禁じ得なかつた。普段、郷里を離れている私は、迂闊にも本紙のコラム「みすず野」が同紙の編集局長とい

望岳山荘にて

い

う多忙な職務にある人によって毎日書き継がれていることを、つい最近まで知らなかった。幸いにして私は、当代の新聞コラムニストとして名を馳せた『読売新聞』の高木健夫氏や『朝日新聞』の荒垣秀雄氏の生前の御様子に近くで接したことがあるけれど、これらの名文家の日常は、コラムの執筆にのみほぼ専念されていたのであった。そのことを想うとき、中野氏の業績は、驚嘆に値しよう。

『みすず野』を一貫して流れるトーンは、松本平をはじめ安曇野や諏訪湖畔が生んだ多彩な人物像と市井の人びとへの濃やかな愛情であり、それはこのコラムでとりあげられた人びとについての個々の描写や犀川のハクチ

『みすず野』のコラムニスト

ヨウを題材にした「北からの使者」などによく表われている。もう一つのトーンは、美しく調和のとれた街づくりにへの秘められた情熱であり、それは「街にせせらぎを」「無法看板」「松本の名水」などの文章によって知ることができよう。同時に、「水と油に」「排他

的ネタミズム」に見られるように一個の新聞人として、松本人の欠点を叱ることも忘れてはいない。

私は、『みすず野』によって、実に多くのすぐれた群像がわが郷里に存在することを再認識したが、また一方で亡き市井歌人の水野鈴夫氏や若くして逝った深志同窓生の赤羽美

佐保(旧姓)さんへの父親の鎮魂、長崎の原爆体験を一気に歌集にされた名医・降旗良知氏のこと、毎月のようにお会いしている警世家の財界人、鐘紡社長・伊藤淳二氏の若き日など、親しい方々の素顔を改めて知ることができた。

第二には、著者のパランス感覚ないしはコモンセンスであって、「軍靴の響き」や「声なき声」は、とかく右左に見がちな社会事象を、きわめて公平な立場から凝視して、しかもさびげない。

は、まず第一に著者の博識が挙げられよう。それは歴史発掘という点においてもっとも顕著であり、私もよく登る徳本峠への山道にある飛騨領主・三木秀綱の女房の碑の背景を教えられた「現代の峠道」、女鳥羽川畔に今は鐘楼のみを名残りとする念來寺の故事を語った「念來寺の鐘」な

第三は、著者の国際感覚であろう。わが国の多くのソ連専門家さえ見誤った去る八月のソ連政変を、その直後に「三日天下か」と予測したジャーナリストは、著者を含めてごく少数ではなかったか。

「上高地の神事」や「早春賦」に見られる著者の筆力は、『みすず野』のコラムニストが青くさい文学青年とは無縁の豊かな詩情の持ち主であることを物語っている。

著者は、清水中学校時代の私の一級下の生徒であったが、私が著者の四十年前を記憶しているのは、同校の国語教師で、すぐれた文学者でもあられた土谷繁富先生が、早くから著者の文才を見抜いておられたという想い出につながるからである。土谷先生が急逝される以前、「中野君」

は、これまた印象深い理科教師だった辻洋子先生のクラスにいたと思っけれど、その頃から著者の今日の輪郭は形成されていたのである。三百二十三編から成る本書は、信州の人びとが、一日一頁、つまり一日一コラムずつ、ゆっくり味わって読むにふさわしい名著だといえよう。(中嶋 嶺雄・東京 外語大教授)